The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	SALC の学生スタッフと創る日本語学習支援 : OU マルチリンガルプラザの活動から
Author(s)	瀬井, 陽子; 義永, 美央子; 難波, 康治 他
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2024, 28, p. 47-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94689
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

SALCの学生スタッフと創る日本語学習支援
──OUマルチリンガルプラザの活動から──

瀬井　陽子*・義永　美央子†・難波　康治‡・角南　北斗§・井奥　智大**

要　旨

本稿は、大阪大学国際教育交流センター日本語教育研究チームで取り組んできた日本語学習支援の実践報告である。2023年度の特筆すべき事項として、大阪大学のSALC（Self-Access Learning Center）であるOUマルチリンガルプラザのこれまでの活動に基づき、大学院生スタッフが従事しやすい体制を整備したことが挙げられる。SALCの運営は、それを運営している教育機関や学生の特色に合った体制を設計することにより、より機能的なものとなる。本稿では、大阪大学の日本語学習者とOUマルチリンガルプラザで従事する学生スタッフの概要を説明したのち、これまでの活動経緯とその成果を報告し、今後の課題を述べる。

【キーワード】日本語学習支援、自律学習、SALC、支援者育成

1　はじめに

大阪大学国際教育交流センター日本語教育研究チームでは、数年前より課外での日本語の自律的な学習を支援するシステムの構築に着手し、セルフアクセスラーニングセンター（以下：SALC）である「OUマルチリンガルプラザ（以下：プラザ）」と日本語学習支援のためのポータルサイト「OU日本語ひろば」を開設・運営している。これらの取り組みは、筆者らが立ち上げ以前から携わり、義永他（2020, 2021, 2022, 2023）にて報告してきた。今年度の特筆すべき点として、プラザの過去3年間の運営実績に基づき、より多くの大学院生スタッフが、学習者の個々の特性や学習ニーズに応じた対応ができるような体制を整備したことが挙げられる。本稿では、課外という位置づけにあるプラザで、どのような日本語学習のサポートを展開すれば良いかを大学院生スタッフ（以下：院生スタッフ）とのミーティングを経て充実させてきた経緯を報告する。

2　施設概要

プラザは、専攻語として開講されている25言語と、留学生等を対象とした日本語学習の自律的な学びをサポートする目的で、大阪大学のSALCとして、2020年10月に豊中キャンパスに開室し、2022年4月に吹田キャンパス分室が開室した。プラザの設立趣旨は、大学生活や研究に必要な語学力の獲得を支援し大学の国際化や外国人構成員のQOL向上に貢献する、複数言語・複文化の理解を深めることで大学構成員の国際性を涵養する、留学生を含む大学構成員の多様性を尊重し、互いに学び合う場を構築するというものである。運営主体は、大阪大学マルチリンガル教育センター[1)]で、協力部局として国際教育交流センター[2)]が日本語学習のサポートの部分を担っている。

プラザは、コロナ禍に開室したため、2020～2021

* 大阪大学国際教育交流センター特任助教（常勤）
† 大阪大学国際教育交流センター教授
‡ 大阪大学国際教育交流センター准教授
§ フリーランス
** 大阪大学国際教育交流センター特任助教（常勤）

年度は大阪大学の活動基準に則り、主にオンライン（Zoom）で活動した。2022年４月以降に対面での活動が可能になり、その後は対面およびオンラインで活動を行っている。

2023年11月現在、運営に携わるスタッフは、コーディネーター２名、特任研究員１名、院生スタッフであるTF（ティーチング・フェロー）３名、TA（ティーチング・アシスタント）14名、RA（リサーチ・アシスタント）２名である。プラザでは、様々なサポートを提供しているが、日本語学習支援を機能別に分類すると、日本語を話す場の提供（会話練習）、学習教材や方法についての相談対応（言語学習アドバイジング）、アカデミックライティング力の育成（日本語チュータリング）、学習計画の作成（ワークショップ）、日本語や日本事情についての情報提供（イベントおよびOMPICサロン）などがある。また、これらの活動を通して、参加者間の交流や仲間作りを促進するという狙いもある。これらの活動は、全体をプラザ担当教員が企画・コーディネートしているが、実際の支援・交流活動の多くは院生スタッフが担当している。そのうち、いくつかの取組については、企画段階から院生スタッフが関与している。院生スタッフは、自らの語学力や国際経験、言語教育経験などを活かしながら、専門性を有する教育スタッフの一員としてそれぞれの担当する活動に従事しているのである。

3　プラザにおける日本語学習支援

3-1　大阪大学の日本語学習者の概要

2023年５月現在、大阪大学に在籍する留学生は、学部留学生332名、大学院生1,734名、研究生715名の合計2,781名である。留学生に加え、外国人研究員も1,161名在籍している。大阪大学は研究型大学であり、留学生についても、特に大学院生や大学院進学を目指す研究生の割合が高い。また、2008年より開始された国際化拠点事業（グローバル30）以降、英語のみで受講・卒業できる英語コースの開講や短期留学生の増加といった変化もあり、一言で留学生といっても、その日本語学習ニーズは非常に多様である[3)]。国際教育交流センターでは、学部および大学院の正規留学生、英語コースの学生、短期留学生を主な対象とした正規科目の提供と、研究生等を対象とした単位を付与しない非正規科目の日本語科目群を提供している。プラザは課外の施設であることから、上記の日本語の科目で扱う内容以外の日本語学習を進めたい、研究生活が忙しく日本語の授業を履修することができないがアドバイザー等と相談しながら学習を進めたい、などのニーズに応える目的でサポート体制を整備してきた。

3-2　日本語学習のサポートに従事する院生スタッフ

プラザが開設された2020年春夏学期は、コーディネーター２名、院生スタッフ７名で活動を開始した。しかし、４月にCOVID-19の感染拡大を受けて緊急事態宣言が出され、施設は閉室となり、院生スタッフは学習支援コラムの執筆、オンラインで可能なサービスの検討などを行った。2020年秋冬学期には新たに院生スタッフ４名が加わり、院生スタッフによる会話練習とイベントの企画運営、プラザ担当教員による日本語学習アドバイジングを開始することとした。この学期から、会話練習、会話練習以外のイベント企画（多言語：25言語のうちのいずれかの言語、または日本語）を担当する院生スタッフのチームができ、教員がコーディネーターとしてまとめる体制を作った。それにより、院生スタッフ同士でよりよい会話練習のサポートについてミーティングを行う、チームでイベントのアイデアを考える、イベント後に振り返りの時間を作って次の企画に繋げる、などが行われるようになった。

表１は、プラザ全体の活動の中から、筆者の１人である瀬井がコーディネーターを担当した日本語学習サポートのチームが実施してきたサービス名、院生スタッフの人数を学期別で表したものである。

2021年には、グループで特定のトピックについて話すイベントと、よりよい日本語の文章を書くためのアドバイスを受けることができる日本語チュータリングが開始した。2022年には吹田キャンパスの開室に伴い、グループで会話ができるサロンが開始し、2023年にはサロンを担当するスタッフが増え、より多くの学習者の対応が可能となった。

実施しているサポートは曜日、キャンパスごとに異なるため、１名または２名の院生スタッフが同じ時間帯で従事する状況であった。そこで、活動に関わる院生スタッフはその日の活動内容を簡単に日報に記録し、別の曜日・時間帯・キャンパスで従事するスタッフも確認できるようにした。同一のサポート

表1．学期別実施サポートと担当した院生スタッフ数

学期	内容	院生スタッフ数
2020年秋冬	• 会話練習	2
2021年春夏	• 会話練習 • イベント • チュータリング	2 4 1
2021年秋冬	• 会話練習 • イベント • チュータリング	2 4 1
2022年春夏	• 会話練習 • イベント • チュータリング • サロン	2 4 1 1
2022年秋冬	• 会話練習 • イベント • チュータリング • サロン	2 4 1 1
2023年春夏	• 会話練習 • イベント • チュータリング • サロン	2 4 1 3
2023年秋冬	• 会話練習 • イベント • チュータリング • サロン	2 4 1 3

を担当する院生スタッフは、学期内に顔を合わせてミーティングが行えるように調整し、お互いの活動状況や気になること、課題を共有した。ミーティングで挙がった意見は、コーディネーターから異なるサポートを担当する院生スタッフに共有するようにした。

3-3　プラザにおける言語学習支援の理念

プラザは大学内に設置されたSALCであることから、院生スタッフも、プラザ内での対応時に自律的な学習に結びつく自己主導型学習（Holec 1981, 大木2022）への意識づけを行い、言語学習アドバイジングの理念（加藤・マイナード，2022）に基づいた対話ができるよう、学期開始時にオリエンテーションを行っている。担当する内容によって詳細は異なるが、言語学習のサポートを担当する院生スタッフには、以下の2つが自律的な学びの促進に重要であることを伝えている。

- 自己主導型学習：学習目的（目標）、学習内容と進度、学習方法、学習経過、評価を学習者が決定する方法
- 言語学習アドバイジング：学習者が自分の学習について振り返り、学習計画を立てるのを助けるために対話のなかで質問する

対応マニュアルには、以下のような流れを記している。

1）利用者が現れたら、名前・対応言語・所属などの簡単な自己紹介を述べる。
2）申込情報がある場合は、希望する会話のトピックや要望などの情報を確認したうえで相手の目標や要望を確認。
3）セッション開始。
4）会話のトピックに困った場合、申込者が用意してきた内容を話し終えた場合は、トピック例を見せ選んでもらう。
5）残り時間が少なくなると、質問等はないか聞き、まとめをする。会話練習は、継続的な参加により上達が期待されるため「今日はここでまで話せたけれど、これは話しきれなかったため、次に来られたら、また続きを話しましょう」のように、次の利用に繋げる。
6）終了後、日報に活動記録を書く。

このように、初めて従事する院生スタッフでもプラザにおける言語学習支援の理念に基づいた対応ができるよう、一連の流れを作り、運営している。

3-4　利用者のニーズ

続いて、各サポートを利用する学習者のニーズについて述べる。2020年10月から2022年3月までは、COVID-19の影響を受け、大阪大学に入学はしたが、渡日できず日本語を話す機会がない、日本語を上達させられる環境にない、という留学生からの相談と会話練習の利用が多かった。2022年4月以降、入国規制が緩和され、オンライン主体で行われていた授業も対面へと切り替わり、キャンパス内で対面での活動が可能になった。この頃からサービスごとに利用者の傾向が見られるようになった。

- 言語学習アドバイジング：様々な所属、学年、属性の学習者の参加があり、主に学習方法や日本語を話す機会について質問をすることが多い
- 会話練習：英語プログラムに在籍している学生の参加が多く、学位取得には日本語は必要ないものの、日本で生活するからには日本語が必要である、将来のために日本語を上達させたい、という理由で参加することが多い
- チュータリング：日本語で論文を執筆する人文学系の大学院生が大部分を占め、論文の一部や学会発表原稿について意見を求めることが多い

- サロン：研究室での研究活動を英語で行っている理工系の大学院生、研究員が利用の中心であり、日本で生活する上で生じた疑問をトピックに挙げ、それに関連する語彙や日本事情について話すことが多い

このような利用者の傾向は、日報、院生ミーティングの記録から明らかになったため、2022年4月以降は、学期はじめのオリエンテーションで各活動の担当スタッフと共有するようにした。それにより、院生スタッフが学習者のニーズを意識的しながら、活動に取り組むようになった。

4　院生スタッフの「多様な日本語学習」への気づき

日本語学習サポートを担当する院生スタッフの所属は人文学研究科、人間科学研究科で、言語文化学、教育学、日本語教育学などを専門とする。しかし、授業科目として開講されている日本語授業とは異なる「課外の施設（SALC）」での活動であり、開室当初は、院生スタッフからうまくサポートできているのだろうかという悩みの声がしばしば聞かれ、スタッフミーティングや従事時間内に、何度も話し合いを行った。

写真1．院生スタッフミーティングの様子

日本語サポートを担当する院生スタッフは、日本語で論文を執筆しており、日本語が母語であるかどうかを問わずスタッフミーティングでは、自身も大学院生として研究生活を送っていることやアカデミックな表現を用いて論文を書くことに悩んでいることが話される場面があった。それにより、院生スタッフが考える利用者の日本語学習の悩みと、プラザの利用者がプラザに求めるものへの乖離が見られることがあった。つまり、院生スタッフが、留学生の悩みにはライティングの問題が多いのではないか、研究計画を書く時に困ることが多いのではないか、と予測して会話を進めるのに対し、プラザの利用者は、論文は英語で書くため日本語のライティングには問題がない、とにかく話す練習がしたい、という声を聞き、戸惑うというものであった。

また、語学の習得は、文法積み上げ式で学んできたという経験を持つ院生スタッフが多く、独学で日本語をゼロから学びはじめた段階で、まずは会話力を向上させたいという声があると、想定する学習の順序と異なるため、どのようにサポートをしたら良いか分からず悩む場面もあった。そのため、参加者との活動が終わった後には様々な声があがった。その声とは、活動時の媒介語使用、日本事情と日本語教育のどちらに焦点を置くか、学習における優先事項は何か、などである。具体的には「研究室で、よく『お先に失礼します』『お疲れ様でした』という言葉を聞くが、『さようなら』とは言わないのか、それらはどんな意味でどんな場面で使うと良いのか」という質問があった日に、媒介語は使わずできるだけ日本語を多く使って説明をした方が良いのか、「日本語学習」をサポートするという名称があるからには、学習者がローマ字でメモを取る場面があればひらがなとカタカナの導入をした方が良いのではないか、生活に関する身近なことを学習者と話すのではなく、文法など「勉強らしいこと」をしなければならないのではないか、そうでなければ利用者のニーズに応えられないのではないか、と振り返るものであった。

それに対し、コーディネーターからは、大阪大学の留学生の中の学生身分、滞在期間、学位取得の言語などが様々であることを伝え、来日後に日本語の学習をはじめる留学生も多いこと、必ずしも日本語でのアカデミックライティングが悩みではない可能性があること、質問が出た時に内容や状況によって媒介語を使うことでより効果的に答えられること、学習の順序は文法や教科書の提示順通りである必要がないことを伝えた。

また、ミーティングで院生スタッフから「研究室の仲間に、研究以外の日本語や日本事情についての質問はしにくいようで、よく質問されます」「日本に住んでいるけれども、日本語を話す機会がほとんどないと言ってプラザに来ているという話を聞きまし

た」などが共有される場面もあり、日本事情を話題として取り上げることも重要であること、日本語をより多く使いたいということが分かれば、利用者側がより多く話せる対話形式にすることなどをスタッフ間で共有した。

院生スタッフとミーティングで共有した内容は、学期の最後に取りまとめ、次学期のはじめに実施するオリエンテーションで説明するようにした。それにより、立ち上げ当初に多かった「この方法で日本語学習をサポートしていると言えるのでしょうか」という不安の声から、学習者にとっての重要な語彙、表現を中心に、学習者が知りたいという内容に耳を傾け、活動に関わろうという様子が見られるようになった。

5　院生スタッフの提案から生まれた工夫

5-1　継続的な参加のために

プラザの利用者の日本語学習経験は多様で、プラザの利用についても、1回きりの参加者もいれば、複数回継続する参加者もいる。また、複数の院生スタッフが対応していることから、1回の活動で完結できるよう、当初はどのサービスもはじめに達成したい目標を聞き、それに沿って進め、終了時間前に質問がないかを確認してその回の活動を終えていた。しかし、1回きりの参加で、その後は来なくなった参加者が増えていくと、一度の参加だけでは参加者が期待した活動ができなかったのではないかという声が院生スタッフから挙がった。そこで、ミーティングで工夫できることを考えた結果、その時間の終了時間前に、その日に扱うことができた話題などを振り返り、できなかったことを伝えて、参加が可能なら翌週に続きを話してはどうかと提案することを心がけた。それにより、継続の参加者も増え、院生スタッフの方でも事前に準備ができるようになった。継続的な参加は院生スタッフとのラポールの構築にも繋がり、院生スタッフ側からも、きちんと参加者が必要としていることに応えられたという実感があるという声が出ただけでなく、学期終了時にはプラザに来たおかげで本当に色々なことが質問できて良かったという声を参加者から聞くことが多くなった。

5-2　会話のトピック一覧の作成

プラザに来る多くの参加者から「日本語を話す機会が少ない」「自信を持って日本語を話したい」「日本語で自分の意見をしっかり伝えたい」という声がある。しかし、院生スタッフが「では、今日話すトピックは何にしますか」と質問すると話題が見つからずに止まってしまうことがある。会話のトピックは参加者または参加者と院生スタッフが相談して決定するが、抽象的な話題や参加者または院生スタッフのお互いがよく知らない話題を設定してしまうと、20分の会話練習または60分のグループ会話の時間がうまく使えず、時間後に「あの話題で良かったのだろうか」「途中から話しづらそうだった」という声が院生スタッフから出ることがあった。そこで、すぐに話題が思い浮かばなかった時に選べるトピック一覧を作成することにした。一覧の作成には、プラザで閲覧可能な日本語初級の教科書「まるごと」[4)]「げんきⅠ」[5)]「NEJ vol.1」[6)]「私らしく暮らすための日本語ワークブック」[7)]で扱われている内容から話題を選び、会話のトピックが思い浮かばない時に使えるようにした。また、例文や文法的な説明を受けたいという声があった場合を考え、それぞれの教科書の該当部分のページ数を入れた。

トピック一覧には「自分について話す」と「日本について話す」があり、29種類のトピックがある。そのため、この一覧があると、全体をざっと見た後に「これについて話したい」と参加者からの一言目が出やすくなった。

自分について話す	
トピック Topics	例
自己紹介 (自分のことについて簡単に話す) Give a simple self-introduction Ⓐ〈カ〉p.32;〈リ〉p.36 Ⓖp.36 Ⓝp.3	・名前 ・大阪大学での所属、学年、専門 (半年または1年の交換留学生か、2年以上の正規学生か ・日本にはいつからいつまでいるか(日本にいつ来たか) ・留学のきっかけについてなど簡単に
私の町について About your hometown Ⓝvol.2 p.99	・あなたの生まれた／育った町はどんな町ですか ・あなたの町で有名なものはありますか ・あなたの町の何が好きですか(嫌いなところがあれば何か
私の国／地域について About your country／area Ⓝvol.2 p.99	・あなたの国はどんな国ですか、どんな言葉を話しますか ・有名な場所や観光地はありますか ・有名な食べ物やお菓子はありますか ・旅行に行くなら、何をお勧めしますか
趣味について About your hobby Ⓐ〈カ〉p.74;〈リ〉p.102 Ⓝp.31	・趣味は何ですか ・いつしますか

図1．院生スタッフが作成した会話トピック一覧の一部

5-3　使用言語の確認と初学者への対応

トピック一覧は、会話練習の際に役に立つが、日本語学習をはじめたばかりの学習者が来た場合、会話ができるようになりたいという目標を持っていても使うことはできない。初学者の場合は、まずアドバイジングセッションを受けることを申込フォームに明記しているが、会話練習への参加があったり、

プラザで問い合わせを受けたりすることがある。その場合は、会話練習に参加できるようになるまでの学習過程を伝えるが、急な対応が難しい、どのようにヒアリングをしていけば良いかが分からないという声があった。そこで、図２のような初学者向け対応マニュアルを作成した。

【0級レベルの対応マニュアル】

日本語で会話をしていて、「趣味は何ですか？」「大学で何を勉強していますか？」「日本人と日本語で話すことはありますか？」「日本の生活はどうですか？」などの簡単な日本語で質問した場合に、質問の意味が理解できない、勉強・大学・生活・趣味・どうですか？などの言葉や表現を理解してもらうことができない場合は0級レベルかもしれません。その場合は以下の対応をしてください。

1. 今日のセッションで使用したい言語を確認する
0級レベルかもしれないと思ったら、まずはそのセッションで使用したい言語を確認してください。その時に何か理由があるかもしれないので、すぐにアドバイジングセッションの提案をするなどせず、まずは現状の把握をしてください。

Would you mind if I continue the conversation in Japanese? Or would you prefer to switch to English?

2. 参加者の情報を簡単に確認する
使用したい言語を確認したら、その言語で参加者の情報を簡単に確認してください。日本語のクラスを受講しているか、英語プログラムか、または、日本語学習で困っていることがあるかを聞いてください。

・How long have you learned Japanese so far?
・Are you an exchange student? Are you a student in an English degree program?
・Are you taking JA100 classes or are you studying Japanese through self-study?
・Do you have any difficulties in learning Japanese?
・Do you want to learn Japanese in Japanese class or by yourself?

3. 今日のセッションで達成したいことを確認する
1、2を確認した上で、そのセッション内で何をしたいか、または、アドバイジングセッションを受けるかを参加者と共に確認してください。

図２．初学者向けの対応マニュアルの一部

マニュアルには、日本語で話しかけた後、どのようなタイミングで英語に切り替えると良いか、何を質問すればその後の対応がスムーズになるかが書かれている。学内には日本語の授業、プラザ以外にも日本語が学べるプログラムがあるため、何をヒアリングし、どのような選択肢があるかを伝えることは非常に重要である。このマニュアルは、院生スタッフの声が発端となり、教員がコーディネーター役をし、院生スタッフの協力により作成された。マニュアルができたことで、院生スタッフが学習者の選択肢を知ることができるようになっただけでなく、スムーズな対応が可能となった。

5-4　情報集の作成

プラザに来る参加者のニーズが必ずしも「日本語の学習」のみでないことは既に述べた。中には、大阪大学にはどのような学生サークルがあるのか、どうやったら入れるのか、他に国際交流ができる場はあるか、留学生向けの就職活動情報を知っているか、といった話題が出ることがある。しかし、それらの情報は大阪大学のウェブサイトの中にあるなど、短時間で活動の中で検索して提示することが難しい。そこで、対面の時はQRコードで読み取れ、オンラインでのセッションならファイルが送付できるよう、よく質問される情報をまとめた資料を院生スタッフで作成した。現在、

- 大阪大学のサークル情報
- 大阪大学内の国際交流情報
- 留学生向けのキャリア支援情報

がある。プラザの日本語サポートにおける機能には、日本語を話す場・学習教材や方法についての相談・学習計画の作成・日本語および日本事情についての情報を得る場・アカデミックライティングの向上・交流・仲間作りがあることは既に述べたが、これらの情報を伝えることも重要な役割であると言える。

5-5　留学生がスタッフとして参加することの意義

院生スタッフの８割以上を留学生が占めている。留学生がプラザ内で日本語学習サポートに従事することは、学習者としてのロールモデルになるだけでなく、母語で学習者とやり取りができる、来日したばかりの不安な気持ちを理解して接することができる、などの点で非常に重要である。しかし「参加者は母語話者と話したいという希望があるのではないか」「自分自身も日本語学習者であり『正しい日本語』が教えられるか不安がある」「地名や人名など、日本語母語話者はよく知っていることで自分は知らないことがあるため、心配」という声が留学生の院生スタッフから挙がった。そこで、コーディネーターからは、プラザの言語ポリシーとして母語話者がモデルであると考えていないことを伝えたうえで、留学生スタッフから不安の声があれば、日本語母語話者のスタッフと一緒にイベント運営ができるよう開催日時を設定するようにしている。

一方、プラザの活動に参加することは、院生スタッフの側にも新たな学びや気づきをもたらす面がある。実際の活動では、参加者も院生スタッフも活動中は日本語を使うことが多いが、活動時間が終了した後は母語や媒介語など日本語以外の言語で雑談をする姿が見られる。この雑談の時間に研究の進み具合について話したり、その他の情報交換をしたりしている様子が窺える。また、プラザに来室する利用者には、院生スタッフにとって先輩にあたる研究員もいる。お互いの自己紹介の中で、どのような研究をしているかが話題になることもあり、自分が所属するゼミ内での研究生活が中心となる院生スタッフ

にとって、プラザの業務を通して、研究科や専門分野が異なる大学院生や研究員と話す時間は、自分の研究生活や院生スタッフとしての対応を客観的に捉える時間となっているようである。

6　今後の課題

本稿では、プラザで活躍する院生スタッフに焦点を当て、プラザの開設時から現在に至るまでの院生スタッフの人員配置の変化、プラザの活動理念の共有、活動の実施と改善に向けた取組等について報告した。自らも研究生活に従事しながら、高い語学力を活かして言語学習支援に携わる院生スタッフは、利用者にとっては頼れる仲間、先輩であると同時に、一種のロールモデルともなる。また院生スタッフにとっても、プラザの活動が所属研究室を超えたネットワークづくりや、自らの研究生活の振り返り、そして教育・学習支援能力の向上に貢献している面もある。「留学生を含む大学構成員の多様性を尊重し、互いに学び合う場を構築する」ことを設立趣旨の一つとするプラザにとって、院生スタッフはなくてはならない存在といえる。

ただし、院生スタッフは数年経つと大学院修了の時期を迎えたり、自らの学位論文執筆や就職活動に専念する必要が生じたりして、必然的にプラザの活動には参加できなくなる。スタッフが比較的短期間のうちに入れ替わるのはやむを得ないことであるが、活動の統一性や一貫性をある程度保つため、経験を積んだ院生スタッフの実践知を後輩スタッフに伝えていく引き継ぎのあり方をさらに検討していく必要がある。

また、現在、院生スタッフはボランティアではなく、大学に雇用されたTAまたはTFとして活動している。これによって、わずかながら院生スタッフの経済的便宜を図るほか、大学院在学中の公的な教育・学習支援経験の一つとして、大学院修了後のキャリア構築の一助となることも意図している。しかし、大学予算が逼迫する中で、プラザの運営経費を維持するためには関係者の多大な努力や関係各所との交渉を必要としているのも事実である。プラザの理念を守りながらも、その成果や意義をプラザの関係者以外にも説得力を持って主張するために、利用者数や利用者の満足度、利用者および院生スタッフの成長の度合いなどを客観的な指標も用いながら明示化していくことも今後の課題である。

付記

本調査の一部は、JSPS科学研究費補助金 課題番号23K00607の支援により実施されたものである。

注

1）大阪大学マルチリンガル教育センター https://cme.osaka-u.ac.jp/（2023年12月12日閲覧）
2）大阪大学国際教育交流センター https://ciee.osaka-u.ac.jp/（2023年12月12日閲覧）
3）2023年12月現在は後継プログラムに名称が変更となっている。
4）独立行政法人国際交流基金（編著）（2013）『まるごと 日本のことばと文化 入門【A1】りかい』および『まるごと 入門【A1】かつどう』三修社
5）坂野永理，池田庸子，大野裕，品川恭子，渡嘉敷恭子（2020）『げんきⅠ第3版』ジャパンタイムズ出版
6）西口光一（著）（2012）『NEJ：A New Approach to Elementary Japanese <vol.1>　テーマで学ぶ基礎日本語』くろしお出版
7）深江新太郎（2021）『生活者としての外国人向け私らしく暮らすための日本語ワークブック』アルク

参考文献

大木充（2021）「CEFRにおける自律学習の役割とアンリ・オレックの自律学習」西山教行，大木充（編）『CEFRの理念と現実　現実編　教育現場へのインパクト』pp.33-66，くろしお出版

加藤聡子，ジョー・マイナード（著），義永美央子，加藤聡子（監訳）（2022）『リフレクティブ・ダイアローグ 学習者オートミーを育む言語学習アドバイジング』大阪大学出版会

義永美央子，角南北斗，瀬井陽子，難波康治（2020）「日本語の自律学習を支援するオンラインプラットフォーム『OU日本語ひろば』の開発について」『多文化社会と留学生交流』第24号，pp.27-34

義永美央子，瀬井陽子，難波康治，角南北斗，韓喜善（2021）「日本語学習支援の全学的な展開に向けて ── OUマルチリンガルプラザとOU日本語ひろばの実践報告 ──」『多文化社会と留学生交流』第25号，pp.55-61

義永美央子，難波康治，瀬井陽子，角南北斗，韓喜善（2022）「リアルとバーチャルを結んだ日本語学習支援の取り組み ── 3年間の総括 ──」『多文化社会と留学生交流』第26号，pp.41-53

義永美央子，瀬井陽子，難波康治，角南北斗，韓喜善（2023）「大阪大学における言語学習支援の展開 ── ポストコロナを見据えて ──」『多文化社会と留学生交流』第27号，pp.85-94

Holec, H.（1981）. *Autonomy and foreign language learning.* Oxford: Pergamon.